

## ビアク島

— 奇跡の生還 —

山形県 渋谷 惣作

私は昭和十七年十二月一日、北部二十一部隊の工兵隊に、初年兵として約二百五十名ぐらいと入隊したのです。

その後、満州經由で北支、山西省で八路軍討伐などをして、十八年十二月ごろか、上海江湾港を出帆し、南方へ、フィリピンマニラ―セブ島―ダバオ島―ハルマヘラ島―西部ニューギニアのビアク島で玉碎戦をした第三十六師団（雪兵团）第二百二十二連隊の配属工兵隊の一員でした。

— それでは、ビアク支隊となった葛目部隊で、終戦までの生存者わずか八十八名の一人として奇跡の生還をされた渋谷さんの、苦しくとも悲しい体験をお聞かせ下さい。

二十隻ぐらいの船団は目的地ニューギニアの最前線の死地に向かって走りました。哨戒機二機と駆逐艦一隻、掃海艇二隻の護衛艦に護られてでした。ハルマヘラ島を出発して一夜は明けて、昭和十八年十二月二十五日朝になって見れば、船団は三隻の船だけだった。「健和丸」、「弁軽丸」、「三月丸」の三隻である。これが雪兵团ビアク島上陸の葛目兵团なのです。

この兵員は一万三千人位で葛目直行部隊の一団なのです。

船団は決して一列には航行しませんでした。魚雷発射された時を考えてのことだと思えます。

舳を右に左にと向きを変えて、駆逐艦と掃海艇は輸送船団の周りをぐるぐる廻りながら、哨戒機は前方を警戒し、一機は船団を廻りながら進行した。

— ビアク島（セレベス島東南部）に上陸して、島の状況はどうでした。

それではビアク島上陸と米軍の進攻について話をします。

夜もそろそろ明け、いよいよ目的地のビアク島に着

いて、島より一キロ離れた所に停泊する。波も静かで引潮が一キロも引いている孤島に上陸を開始しました。軍属共合わせて一万二、三千の兵士が続々と上陸しました。

私たちの三隻の船以外は、ニューギニアのバブア島のサルミに向かったのである。

私たちよりも早く上陸している海軍陸戦隊、砲部隊の船舶工兵一個小隊によって上陸用大発舟艇で上陸作業が始められた。

食糧、弾薬等の荷物下し等毎日続いて、クレインの音がこだました。兵士の上陸は夕方までで終わり、私たち木工班は一足先に上陸し、隊長の休む六坪程の小屋作りに掛かった。

ピアク島は、二等辺三角形のような島で、南方二十キロ、東西十二キロ、周囲六十キロぐらいといわれています。上陸地点はボスネック港でした。

葛目直行部隊（第三五二三部隊・当時隊長大佐）の私達工兵隊は上陸後直ちに道路作業を開始し、ボスネックよりマンドンまで二月ごろまでに終了した。来る

日も来る日もジャングルを切り開き、道路構築に頑張った。

道路作業が終わって飛行場工事にかかり、昼夜の区別なく頑張った。一個小隊は道路、二個小隊は飛行場、各部隊の応援も得て、昭和十九年四月ごろまでに出来上がった。我等工兵隊はじめ将兵の別なく勇み立ち、飛行場も完成した。

部隊長より訓辞があつた。その言葉の中に「この編成を以て米英に当たるならば、米英の如きは、一蹴である」とくり返しくり返し、らんらんと輝く目で語った言葉が今も忘れられない。

毎日の道路作業で、ピアク島の道路は出来上がり、工兵隊三個小隊の内、第三小隊澤田少尉の指揮の下で二十日間の予定でヤーベン島にも道路工事に行った。その島には看護婦が六十名もいた。四月中旬にピアク島に帰った。

上陸後の作業は相当酷かったですでしょうが米軍の空襲などは無かったですか。

同島のボスネック港には駆逐艦一隻と輸送貨物船二

隻が入港しており、荷降しにも手伝った。今にもスコールが降ってきそうな空模様にならめしく空を眺めながら頑張っているところへ、雲の切れ間からロッキード戦闘機が降下、二回にわたり機銃掃射を受けた。我が艦上より砲撃したのだが、何の効もなく作業中の兵士三十余人が負傷するといういたましい一日であった。

当時、隊長の推測では一日三回にわたって七十機飛来したといっていました。昭和十九年四月十八日正午のことです。翌日から五月二十七日、米軍上陸の日まで毎日三回にわたって、その日によって多少の違いがあっても、三、四十機はたしかに飛来しました。平均四十機と見ても一日に三回で百二十機が飛行する計算、一機に爆弾四発積めば百二十機で四百八十発は一日の投下数、四百八十発が五月二十六日まで四十日間、一万九千二百発の爆弾投下数になる訳で全く驚きの一語に尽きます。

この小島で生きて帰って来た今の自分を不思議というよりはかない。島の周囲は砂浜でヤシの木立である。

しかし、爆弾の破片で鈍けずりしたように倒れている。食べるに食べ物はなく、米軍上陸まで、マラリヤ、デング熱、爆風等により四分の一の兵士が戦死している。昭和十九年五月二十日頃、哨戒機二機が毎日海上を警戒していたが、たまたま哨戒機より「敵の艦隊は空母二隻をふくめ、ビアク島に向かって進行中で、二十三日ごろの朝までは到着の予定」との報告で、葛目部隊全員がそれぞれの陣地について待機していました。

私は鎌田分隊長の配下でボスネックの洞窟の中に入っていた。分隊全員は十五名でしたが、三日たっても連合艦隊は現れず二十七日の朝を迎えました。

その日は澄みきった青空の南下洋の朝の陽は照り、まぶしい。「ふと」米谷上等兵が私に「顔洗いにいこう」とさそった。私と米谷上等兵と二人で椰子の木立ちの浜辺を引潮の海に岩の合間から湧き出る真水に顔を洗うためにささやきながら歩いた。

沖合に見える船に米谷が私に向かって、「渋谷、我が軍もいよいよ海軍記念日を期して攻戦に入るナ」と言ったので沖を見れば、アオキ島の手前に黒々と船が

見える。「どれが大和かな」などといいながら歩き続ける二人を驚かせた。ドドンという砲音にびっくり、「演習かな」と言つて立ち止まる。また四、五メートル歩き続けて二度目の砲音にびっくりして洞窟に引き返して「敵襲」と呼びながら浜辺を走つた。

陣地内でも緊張していて、それから半日続けざまに正午まで艦砲射撃が続いた。

一周囲六十キロの小島に対し連合軍の大艦の砲弾と大部隊の上陸では渋谷さんの隊はどのような状態でしたか。

六月十八日には大本営との連絡が切れる。混戦状態で私の周囲のことしかわかりません。分隊は洞窟に入っていました。一歩たりとも外に出ることが出来ません。午後の二時ごろと思うが洞窟の入口から敵兵の声、「日本兵隊いるか」という声にびっくりした。艦砲射撃と今の敵兵の声に余りの恐ろしさに戦友の一人が、「います」と一言返事した。その時、分隊長は皆を見殺しにするよりとやむにやまれぬ思いで一人の兵を犠牲にしたようです。それから一時間も過ぎた頃、入口

の方よりゴトンゴトンと言う物音と同時に点火され、洞窟の中は火の穴と化しました。

ガソリンか石油の入つてるドラム缶をころがして火炎放射機で点火されたようです。その直後に戦車砲から入口掛けて五、六発の砲弾が打ち込まれたようです。そのため岩石が崩れて晴山兵長が戦死しました。幸い洞窟の中は、ひょうたんのように入奥の方が広くなつていて、四、五十人がゆつくり入るくらいでした。汗はだくだく息も止りそうで、私は倒れました。

すると冷たい水で気がついた。すぐ息つきが楽になつた。それは息も絶えだえに倒れた自分の脇に岩石と岩石の切れ間から冷たい泉が流れ出ている。手のひらが隠れるぐらい水が流れていた。何と幸運なことであらうか。

その小川の水が倒れた私を救つてくれたのである。息がすぐ楽になつて、思いきり水を飲んだ。おいしい水、恵みの水、救いの水、有難いと思つて涙が出た。あの時の水の味は今でも忘れられぬ。

そうしてゴーゴ燃える炎の音の中、洞窟の奥で叫ん

だ。

「おうい皆、こっちへこい。川が流れてるぞー」  
「流れる水の所に鼻をくつつけろ。楽になるぞー」  
と言ったことを覚えている。

それから三日間水だけ飲んで過ごした。入口の側に積んであった食糧は皆んな焼けている。上陸した米軍は、ボスネックの砂浜の椰子の木立にテントを張り、夜になっても私達は外に出ることも出来なかつた。苦しい洞窟の中で時々外の様子をうかがいながら三日目の午後を迎えたが皆下痢になやんでいました。

銃声は止んで、浜辺が静かになつたので、班長は外の様子を見て来るよう門山上等兵に命じた。

瓦礫の山のようになつた洞窟を入口めがけて走る。

門山上等兵、「班長殿、誰もいないです」と声がする。

鎌田班長は、すぐ「生きている者名乗れ」といった。

薄暗い洞窟の中でそれぞれ名乗った。九名いた。入口付近にいた古兵達にはわか火炎に巻き込まれて死んだ。

班長は、「二人一組に手ぬぐいで輪を作り、輪の中

にお互い片手を入れて握れ、どこに行くにもはなれるな・」。二度も、三度も繰り返して叫びながら真先にジャングルの山を駆け登った。それが班長との最後の別れでした。

洞窟から決死の脱出をされたのだが、部隊本部と合流出来たのですか。

私と門山と瀬戸山の三人はジャングルの山を登った。無事に上りきろうとした時、もう一息の所で敵に発見されたのか、機関銃の射撃を受けたので、私は真中になって登った。瀬戸山を引きずりながらだが腹部貫通でどうにもならず、自決の手榴弾を渡して門山の後に続けました。その後ジャングルの中を一日半もさまよい歩いた。

私は前にも申した「米軍ビアク島に向かって進行中」という報によつて病人や負傷兵をジャングル奥地に移した野戦病院にたどり着いた。安心したら皆が下痢と疲れのために弱っていた。四、五日振りに食べるお粥に米の有難さが胸を打ち、食器に涙が落ちこぼれました。

「米軍は上陸して、どのような攻撃をして来たのですか。渋谷さんの工兵隊はどうなりましたのですか。」

米軍は上陸後一夜にして各部落に五百基の高射砲と照明灯を取りつけたことを捕虜になってから知ったのです。

そのころ工兵中隊本部では松田軍曹、高橋澄上等兵の兩名が部隊本部の命令受領者として西洞窟にいたが、兩名共戦死という報が病院に届きました。

マンドン攻撃では荒井平八郎少尉の指揮する一小隊は苦戦した。敵は樹木の上に櫓を組み、機関銃が雨のように撃つて来るのです。二日間の攻防も効なく、小隊長は「中隊長殿、荒井小隊前進不可能」と叫んだといひます。その声に中隊長は「馬鹿者、突撃、突撃」と軍刀を振り、自分は後方において怒鳴ったということ、を死をまぬかれた兵より聞きました。誠に可哀想に無理な命令によつていたましい兵士の命を落とした攻防戦でした。

その激戦の中で私と同年兵の小隊長の当番兵であつ

た鈴木芳郎上等兵が頭部貫通で戦死しました。

昭和十九年六月二十六日には通信される。その後は本国とは全く連絡なしです。そのころ命令受領者として西洞窟におつた松田軍曹、高橋澄上等兵が戦死した。私は病院から二キロも離れている中隊本部にたどりついて半時も過ぎたころ、大屋軍曹と渋谷上等兵（私）は西洞窟に行き、中隊付命令受領者として中隊長に申告して隊本部のある西洞窟に向いました。

それから二、三日して部隊長自決ということになります。上関進一軍曹の話によれば、部隊長は、副官と旗手の久村少尉と当番兵の上関軍曹の三人を側に呼び、上関には

「長い間お世話になった。君は必ず生きて帰り、私の郷里の四国高知の実家にも行き、この事を伝えてくれ」

と言ひ、副官には

「部隊長自決のこと誰にも知らせるな」

と言ひ、旗手の久村少尉には

「軍旗を焼いて敵に渡さぬこと」

など数々の話をしたと言うことです。このことは上関軍曹が私に収容所で話してくれた。

その後は命令もなかった。生きてる者同士ジャングルの中を歩いた。敵に出会えば交戦し、その度に兵は死んでいった。私達工兵中隊最後の戦闘は七月中旬頃と思いますが、飛行場滑走路が爆弾のためにこわれた所を修理するために米軍は先頭のトラックが骨材を満載してついでくる。

※ ビアク島玉砕は昭和十九年七月二日と記録されている。

一部隊長が自決し、本部よりの命令も出なくなったということですね。指揮系統が無くなった後はどのように行動したのですか。

その戦車に肉迫攻撃をやったのです。中隊長以下工兵中隊二百余名の内、当時の生存者二十六、七人でした。その中で無傷者八名だったが、全員が戦車肉迫攻撃に参加したのです。その中から九人だけが生存しました。その生存者の中からも次々に死亡し、捕虜となった三人だけが生き残ったのです。

最後に生き残れた三人の方々と戦没された方々の話をして下さい。

残った九名の内、阿部春治兵長はさがしてもいない。どうしたことか分からないが、私より早く捕虜になった。八人は来る日も来る日も食べ物求めて山の中を歩いた。日中は歩けない。まったく梟のように夜も歩いた。塩分も取れない。甘いものとして野生の椰子の実やマンゴー、サンゴヤシの新芽、バナナの根（大根のようだ）など手当たり次第に食べた。

ある日のことです。ソリド部落のソリド川周辺にタロイモの畑があり、そのタロイモ掘りを計画したのです。いよいよ出発の日、中隊長はマラリヤのために高熱を出して、ジャングルの中で草を枕に寝ていた。看病のために加藤友治と粕谷辰治を隊長の所に置いて、五人でイモ掘りに出た。

空も見えないほどの密林の中を五人はよたよた歩く。六尺棒の杖（短い杖だとつまづき転んだ時喉を突いてしまう）と帯剣は何するにも一つの道具。土人の歩く細道は敵に見られるので歩けない。道なき道を

木の皮を剥きながら五人で五、六メートルくらいの間隔で歩き続ける。私達は苦勞と空腹に耐えて、ただ黙々と歩いた。藤つるや木の根につまづきながらも歩くこと二日間。ようやく目的の畑に着きました。月夜の明かりの下で、道具は帯剣だけ。生のまま食べてまた掘り続けて夜は明けた。

山の中に隠れて一眠りしたが、疲れた体に沢山のイモは背負われない。皆適当に背負って、また夜の道を皮を剥いだ木を探しながら歩いた。何を考えながら歩いているのだろう。祖国の父母や、妻子、兄弟のことも思い浮かべている。空腹をかかえて歩きました。着のみ着のまま、疲れたシャツ一枚、帽子もふやけてポロポロ袴も無しです。栄養失調で毛は赤くなる。肋骨も出て、これ以上瘦せられないという姿です。

時にはキキとかツツという猿の声も聞こえて来る。一日位歩いたろうか、灯りが見えて来た。「オヤ」と思い、粕谷博が先づ小走りに走って行った。彼の言うには、

「敵がテントを張っている。ここは通りぬけ出来ない

よ」という。それから、その地点を遠回りして歩いたが元の道には出られない。完全に迷った。マラリヤで熱を出す者も出てきた。お互いに助け合いながら、山草、木の実等食べながら海辺に出ることもできず毎夜歩く。

ある夜はこっそり浜辺に出て海水を缶づめに汲んで来て塩分を取ったこともある。また、椰子蟹を生で食べたこともある。十五センチぐらいのトカゲや野鼠の死骸を拾い、老眼鏡のレンズで火を付け、煮て食べたこともある。

そうしているうちに、阿部文治が変なことを言う。「俺の指九本しか無い」とか、「豆腐食べたい」と言うので、「阿部、阿部お前、何だどうしたんだ」と私たちは驚いて聞いても本人は何も答えず、ニヤニヤ笑っているだけで、一夜明けて死んでいる。それから十日位もたったろうか、熊谷正蔵が歩くことも出来なくなってしまった。三人一緒にボスネックの裏山の小さい洞窟で看病したけれども二日間で死んだ。空腹と疲勞とマラリヤ熱と重なる苦闘によって倒れて行く。



私は心を決めた。皆に夕方「食物を探して来るからお前達はイモ食つてろ」といつて出た。「生イモ」は、支那で作戦の時に生で食つたこともある「落花生」よりは食べやすい。私の目指すところは近くにある火力発電所である。ゴーゴーと発電音の高鳴る米軍の屯舎の食堂に向かつて、月の明かりにすかして見て、その宿舎の床下にもぐり込んだ。日本軍は全滅して、そこには五、六人の兵しかいない。食パンを盗んで出るまでは何時間ぐらいたつたのか分からない。月は青白いほど輝いてる夜であった。食パンは盗んだし、皆の喜ぶ姿を思いながら歩いて着いたら少しで夜が明けた。土人の籠に入れて持つて帰つて皆に食べさせた。私たち三人は本当に淋しかった。

次に三人がどんな姿をしていたか説明してみましよう。昭和十九年二月十五日付で私は兵長に任命されて以来、頭にバリカン一度も使つておらず、髪も刈らず、髭もそらず八か月も過ぎれば想像もつくだらう。首筋にかけて前も後ろも鼻の下もどこ見ても、ポーポーである。山猿よりも男振りは悪い。夜は食物探し、明け

れば穴の中の生活、三人は祖国の話や自分の身の上の話等。最後はやっぱり食い物の話に変わる。

そうこうしている内に、一籠の食パンを思い出しては「渋谷、三人で発電所に行こう」と言い出した。私は余りに恐ろしいことがあつたのでそれを思うと行く気になれなかつた。しかし、空腹に耐えながら生きてる私たちは知らず知らず火力発電所の近くに來ているのである。

私が道を知っているので、先になつて歩いたが、どうして粕谷が横道に入つたのか分からないが、草原に敷設してある地雷の細線にひっかかつた。その一瞬、青白い煙が目の前に上がった。「地雷」と言つて臥したが、皆は逃げた。立つて逃げた二人の後から、ドカンと爆発した。破片が逃げる二人の後から当たつた。

千葉幸一が即死。虫の息で粕谷が生きている。腹部貫通と大腿部首貫の重傷である。三十分位で死んだ。草をむしり取り二人に被せた。とうとう「俺」一人この山の中に残つてしまつた。私も死のうとも思ったが、また何としても日本に帰つて、この残酷な有様を世に

訴えることだと思ひ返し、草を分けて二人に近寄り顔を見た。何度も見ましたが、その場をはなれる気にはまったくなれませんでした。親、兄弟、親戚のことなど走馬灯のように次から次へと浮かぶ。

また、恋しい人のことも浮かんだ。いろいろと考えながら小鳥の声で目覚めれば朝になっている。妄想の一夜が去っている。粕谷と千葉の亡骸に夢中で近寄り、二人の小指の爪をかじり取り、軍票(軍で発行した錢)に包んで俺は必ず生きて帰り、この苦しみを故郷に伝えようと立ち上がった。

― 渋谷さんは白犬に救われたといっていましたけど、ういうことなのですか。

今申した粕谷と千葉の小指を包んで立ち上がったその時です。スピッツのような犬が五十メートルも先に走っているのです。

「オヤ、この辺に部落があるのかな」と思い、その方へ歩いた。犬は山の中の本立をぬって走って行く。犬が見えなくなった所まで行くと、またお尻が見えて走る。

二、三度こんなことの繰り返しで、私は犬について行った。広い広い原っぱに出た。そこは軍属の方々が自活のために作った農場だったので。

小さいトマトが鈴成りに実をつけている。夢中で食べた。食べながらさっきの犬のことを思い出した。犬はどこへ行ったのか分からない。変わったこともあるものと思ひ、トマトを食べながら、あたりを見回すと小さな小屋がある。おそろおそろ近づくと人がいる。

一瞬びっくり、相手もびっくり。お互いに日本兵と分かる笑顔で「何中隊だ」と尋ねると、「歩兵第三大隊第十一中隊の泉田源吉上等兵」と名乗った。私も名乗って一緒に歩くことになった。二人の戦友と分かれてから三日ぐらひは一人で山の中を犬を目あてに歩いたような気がしてならない。初めて合った二人は語り合う。

― 「人間は孤独には耐えられない淋しいものだ」。とも言つて、友を得た嬉しさに「良かった」と笑いながら食物探しをしたが、そんなにトマトと南瓜のつるばかり食べられない。二人は小屋を後に歩いた。

髭は伸びほうだい、髪は肩まで伸びて六尺棒を杖に全身着のみ着のままの姿で、スコール雨が降れば雨水で洗濯して、来る日も来る日も山の中を一月も歩いた。二人は疲れたが、ボスネックの裏山を歩いていた。発電所近くの所にゴミ捨場があつて、時々チョコレトやパンの屑とか食べかけのリングが捨てられているのでそこに行つた。

瘦衰えた体で中風の人が歩くような姿の私たち二人に近くから「ハイハイ」とかん高い声がする。驚いて立ちすくんだ。私たち二人は敵兵に手を取られて、ジープに乗せられた。発電所の一室に入れられ何も語らず黙々としていた。頭髮の黒々とした三十歳ぐらいの通訳が入つて来て、「長い間ご苦労だったね」と、やさしい声でねぎらわれたが、私たち二人は捕虜になつてしまつたのです。

通訳は、私たちに向かつて、いろいろなことを聞きました。

そして「私の父は青森で、母は京都だ。私はハワイの二世で戦争と同時に戦地に出されて通訳をしてい

る。私には祖国が二つあり、日本が負けても、アメリカが負けても辛い立場にあります」と語つた。私は無言のままうなずいた。

その後、ジャングルの白犬は死んだ。粕谷の霊が私に着いてきて誘導させたのではないかと思うようになりました。

―米軍収容所の生活についての話を。

その後、五日間もそこに置かれたらうか、ピアク島の飛行場からニューギニアのホーランジアアに移つて、簡単な診察を受け、オーストラリアのプリスペン町に着きました。その病院では、全身診察されてから看護婦二人付き添いで、列車でハイと言う町の陸軍病院に行き入院したのです。私のベッドはNo十四番でした。

その時「渋谷、渋谷」と呼ぶ声に、「こんな所で私を呼ぶ人がいるのか」不思議に思いながら返事をした。その病室には二十人位のベッドが並んである。「誰だ」と尋ねると、「粕谷だ」と答えた。「ハッ」と思った。粕谷は私の目の前で戦死したのと思つたが、粕谷が

二人いたことに気づいた。「辰治君か」と聞いた。中隊長の所に看病のため置いて来た粕谷辰治一等兵だったので。「よく生きておった」嬉しさの余りあたりかまわずベッドに顔をうずめて泣きました。「生きてよかった」と言つて二人に隣のベッドの人も泣いてくれた。

七か月前に中隊長の所に加藤友治兵長と粕谷と二人を残してイモ掘りに行ったことは前に言いましたが、別れて以来逢うことも出来なかつたわけです。

「兵長はどうした」と聞いたら、「水汲みに行つて、そのまま帰つて来なかつた」という。

加藤兵長は中隊長の看病のために残つた一人だったのである。「中隊長はどうした」と尋ねたら、「マラリヤと下痢で死んだ」と言うのです。中隊長は「渋谷達は必ず探して帰つて来る。私はここを動かかん」といつてたそうです。最後まで私たちを信じて死んだ中隊長を思うと胸のつまる思いがしました。深い深い密林の中を私たちは、掘つたイモを背負い、何日も何日も隊長を探したことも話しました。加藤も隊長も死んだ後

は、粕谷も、「私と同様に山中一人で歩いているところを捕らえられた」という。今は脚氣とマラリヤのため入院という。ヘイ町の病院に入院したのは、昭和十九年十月十日頃と思います。

入院患者は十九名いた。私が退院したのは、十二月二十六日と思つている。退院後はホーランジャの收容所に移され、特別養生棟に入り、三分、五分、七分、全粥と普通食になるまで十五日間も掛かつた。收容所には、千四十人の日本兵がいた。早い者は、十八年秋に捕まつた人もおつた。それは帰らぬ師団とも言われた猛部隊の兵士である。

捕虜となつてからは働く仕事も何もない。私は大工なので木工班に入り、玩具作り等をして、一日三ペンスの金を貰つたので、宿舎の方々にタバコや歯みがき等も買つてやつた。

米国本土より取材に来られたPXと言う画報にも木工班の作業振りなどが出たこともある。

―帰還したのは何時頃でしたか、帰つたら家族の人は喜ぶ前に先づ驚いたことでしょうか。

昭和二十一年三月四日の点呼の時、帰国の準備をするようにとの知らせに、皆小踊りして喜んだ。

シドニー港に「第一大海丸」が寄港して、アッツ島の残留者を乗せてホーランジャー港に着き、私たち収容所の全員を乗船させて、いよいよ祖国日本へ向けて出航したのです。

今でもあの時のドラの音が耳に残り胸一杯になる。

船は最大速力五ノットだそうで、四月三日、一か月かけて浦賀港に入港し、半日もしてから上陸、皆そこで二泊三日して帰宅したのです。帰りの際に支給された荷物は、元海軍の毛布、三人に一枚だから三つに分けて、その中にカンメンポウ（食パン）二袋（東北人だけ）、北海道の人達には白米三合とカンメンポウ三袋を支給され、列車に乗った。列車の窓は破れて窓から降り降りするお客もいる。負けた国の悲しさとかやしさがいよいよこみ上げて来るのを堪えた。

いよいよ故郷の遊佐駅のホームに降り立った。駅員は女二人であった。

小豆色のシャツに赤いPW（捕虜）のズボンをはき、

荒縄で縛った小荷物を持ち髭は伸び、髪は肩まで伸びてる姿で、私はこのまま家に帰る気にもならず、駅前の石川床屋に吸われるように入った。お客さんが一人いた。おじいさんである。

「どっちから来たでえ」と言う。「南方のニューギニアから来た」と答えたら、おじいさんは、「ホホ、よく帰って来られたの……エエ」と感心する。

「どうぞ」といわれて椅子に座り、バリカンを入れたが、さて、金がないのどうしよう」と考えた。理髪は終わった。私はいいにくいが思い切つてしゃべった。

「私は、今帰ったばかりで、入ってから思いついて、恥ずかしくてどうしようと思つたけど、知らない店でもないの刈つて貰つたけど、明日家から持つて来るからどうか頼む」と願つた。

「イヤイヤいいよ、いいよ、長い間ご苦労したもので」といつて無料の散髪をして貰つたことを思い出しては今でも恥ずかしくなります。

屋敷の入口に着いたら、母がさつまいもの苗床を作

つているのが見えた。

「今来た」といったら母は、「惣作だか、ホーお前だか」とただ驚くばかり。

小さい手荷物を取って家に入った。帰ったら、あれも話そう、これも語ろうと思つて帰つて来たものの、何も話せませんでした。

翌日、三日熱マラリヤが出た。熱は上りながら体が寒くてふるえる病氣です。妹達が付きつきりで見病したらしく二人共枕元にいた。朦朧として目覚めた。余りの熱とうわ言に驚いた親達は、村上医者を呼んだそう。四十度の熱に顔は真っ赤だったといっていました。

「どんなうわ言だったのですか。沢山の戦友も死んで渋谷さんも九死に一生を得た奇跡の帰還ですからね。」

熱も下がって平常の体に戻り、油汗はだくだく、うわ言までいったあの病氣がうそのように治った。しばらくして祖母が、私に向かって、「お前はずいぶん寝言をいっていたが、粕谷博っていう人、どこの人だ」

と聞かれました。その人はジャングルの奥地で地雷の破片で戦死した上藤崎生まれの粕谷博のことです。

自分は今生きて親元に帰還し喜んでいますが、その陰にはせつない事実があり、どうして粕谷家に報告しようかと秘めたなやみがあるので、うわ言に表れたのでしょうか。あの時あんな事がなかったら、一緒に帰つて来て兄弟のようにつき合ひ、また語り合うこともできて、喜べるのに残念でならない。私は一生くやまれてならないのです。

「俺だけ生きて来た」と、どんな顔して粕谷家に行けるか。悩んだり考えたりした。祖父母にさとされ、妹二人が私をリヤカーに乗せて、六キロも離れている上藤崎部落の粕谷家に行きました。

ことの次第を話した。その時に粕谷の母が、「不思議な出来ごとがあります・・・。」と。

話を聞いているうちに、私が自分の家に帰った四月七日夜のこと、障子の戸が何やらさらさらとさわる音がしたそうです。それから話を続ける母は、たった今玄関で、「オー」と言う声が出たゾー、隣の父さんで

も呼んだかなと思つて玄關に出て見たが誰もいない。その時、すぐ博の声とそっくりだと母も立って、「博、博」と呼んだという。おどかすつもりで隠れているんじゃないかと玄關の外に出て、「博」と呼んで見たというのです。

思えば、あの山の中で息たえだえの粕谷を抱いて三十分付き添い、「お前の家は上藤崎だな」と幾度も幾度も聞いた。ただ首を縦に振って答えた。その時から私について私を守り通してくれたのだと今でも思っています。

私は、鈴成りのトマト畑に道案内してくれた白犬のことも、泉田源吉と出逢つたのも、皆粕谷の御霊のなしたものと思われてならない。

毎年、九月には彼の仏壇にお参りしている。公報で戦死を知らされた十九年六月と書いてある木の符には「粕谷博之霊位」とあるだけでした。

## 南方の船舶工兵、終戦後の重労働

広島県 山下 廣一

―山下さんは最初軍属で、後で広島船舶工兵として召集されたそうですが、何年徴集でしたか。

私は大正六年八月二十八日生まれなので、昭和十二年徴集兵です。召集前は軍属として、広島運輸部艇舟隊で上海へ、昭和十三年六月、呉第三船舶司令部勤務となり、各国船舶の航行監視を高い槽の上でしていた。英国の輸送船が何回上下したかなど各国別に記録をしていたのです。

八月ごろから蕪湖の艇舟隊分遣隊の雑務に従事していたが、九月三日、作業中左足関節骨折。陸軍病院から十月内地送還、大阪で入院治療したが、十四年二月ごろ解雇となり広島県深安郡の実家へ帰った。

同年五月一日、広島工兵第五連隊に臨時召集、八月骨折再発で歩行ができず、広島赤十字病院に入院、